

「棒状鹿角製品」小考

- 朝日遺跡出土新資料の位置付け -

● 川添和暁

縄文時代中期から弥生時代の長期にわたって見られる精神文化の遺物として、「有鉤短剣」、「棒状加工品・叉状加工品・長叉状加工品」などと呼ばれている遺物が知られている。これらを体系づけた研究は、すでに春成秀爾によってなされてる(春成 1985)。その中でも今回は春成の「棒状短剣」、金子浩昌の「棒状加工品」と呼称しているもので鹿角製のものに関して特に「棒状鹿角製品」として取り上げる。中心とするのは棒状鹿角製品が特殊な発展を遂げた、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての資料である。朝日遺跡99年度調査では、弥生時代貝田町式とされる貝層から、変形工字文を持つ当該資料の出土を見た。この遺物の出土の意味を探っていききたい。

はじめに

東海地方以東の弥生前期以降の文物には、いわゆる「縄文的」要素を含むものが多く見られる。直接的もしくは間接的に新しい文化の波動が来たときに、その地域独自の事情により、旧来存在している文化要素との間で再編が行われるのは、どの地域でも同様であると思われる。その波動が連続して何度も来り、間接的でもどの程度の間接的かなどによって事情はかなりの複雑さを呈してくるであろう。

今回は、金子浩昌などの「棒状加工品」(金子・西澤 1985・86)や、春成秀爾の「棒状短剣」(春成 1986)を、特に鹿角製品を中心に「棒状鹿角製品」として取り上げ、上記のことに触れてきたい。

1999年度の愛知県埋蔵文化財センターによる朝日遺跡の調査により、当該資料が1点出土した。この資料を糸口にしていきたい。

1 朝日遺跡99Bb区出土棒状鹿角製品 (第4図10・写真1)

朝日遺跡は東海地方屈指の環濠集落である。この資料は、NR01と呼ばれている自然流路内に形成された貝ブロック内から出土したものである。貝ブロックは発掘の所見から、弥生時代中期貝田町式期に形成されたものと考えられる。

材は鹿角左の角座部分から角幹部分を使用しており、第二枝分岐点付近までが現存している。全体を研磨することによって鹿角表面の凹凸をなくしている。製品は上から上端部(「部位Ⅰ」とする、以下同じ)・上端部と文様帯間の部分(「部位Ⅱ」とする、以下同じ)・文様帯(「部位Ⅲ」とする、以下同じ)・棒状部

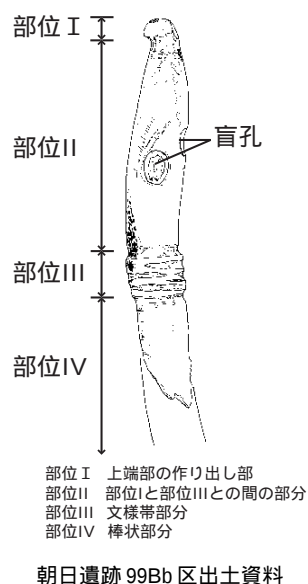


図1 部位説明図

分(「部位Ⅳ」とする、以下同じ)という構成である(第1図参照)。部位Ⅰは下に挟りを入れることによって明瞭に部位Ⅱと区別をしており、部位Ⅰと部位Ⅱの境に当たる挟りの部分に合わせて斜方向に穿孔が施されている。部位Ⅱには縦1.7cm、横1.5cm、深さ0.3cmほどの楕円形もしくは隅丸方形の盲孔が90度違えて付けられている。さらにそこから6cmほど下の部分に幅3cmほどの部位Ⅲが上下を削ることによって作られており、ここの直上がかつて鹿角の第一枝のあった場所である。部位Ⅲには工字文がレリーフされている。部位Ⅲから部位Ⅳにかけて欠損がみられる。棒状部分の形状は不明である。

2 縄文晩期以降の棒状鹿角製品

管見の限りで該当資料の類例は、朝日遺跡を除き 8 遺跡・13 点が知られており、朝日遺跡でも既に報告された他の類例が 2 例存在することから、合計 9 遺跡・16 例となる。

結論の一部を先に述べることになってしまうが、これらの資料の構成は画一化されており、構成部位を上記の「部位Ⅰ」・「部位Ⅱ」・「部位Ⅲ」・「部位Ⅳ」に該当させることが可能である。以下の記述では説明の便宜上、この区分を使用することとする。

(1) 椿貝塚 (図 2 - 1)

宮城県亘理郡亘理町、標高約 12m の丘陵先端部に立地する貝塚である。貝層の地点は 5 ヶ所あり規模は長径 150m・短径 100m に達し、貝層の主体はヤマトシジミであるとのことである。ここで取り上げる資料は昭和 48 年に貝塚中央部の発掘調査により、大洞 A' の貝層が確認され、貝層下土層より大洞 C 2 の遺物が多く出土したときの資料である。資料は大洞 A' の貝層からの出土で、出土状態自体には特殊性はなかった模様である。

資料の材は鹿角左の角幹、第二枝より先端にかけての部分を使用されている。全体を研磨することにより鹿角の凹凸をある程度滑らかにしている。くびれにより部位Ⅱと明確に区別されている部位Ⅰは、上下からの削り出しにより中央部横方向にレリーフ状の装飾が見られる。直線状に見えるものの若干のうねりがみられ、工字文を意識した可能性が高い。部位Ⅱは非常に研磨されており、横方向に磨痕が多く見られる。中央には長さ 3.0cm・幅 1.5cm ほどの隅丸方形の段がつけられている。これは後述する千葉県荒海貝塚のあり方と共通しており、盲孔に相当するものと考えられる。部位Ⅲは幅 1 cm 弱で横方向に工字文のレリーフが見られる。部位Ⅱと部位Ⅲおよび部位Ⅲと部位Ⅳの境も挟りにより明確に区分されている。部位Ⅳはよく磨かれて鹿角表面の凹凸がわずかに残る程度となっている。部位Ⅳは途中で欠損している。

(2) 荒海貝塚 (図 2 - 2 ~ 4、図 3 - 5・6)

千葉県成田市、沖積地に半島状に突き出す、標高 30m 内外の丘陵状に立地する。いずれもヤマトシジミを主体とする A・B・C の三地点の貝層からなる。ここで取り上げる資料は、A 地点の千綱・杉田Ⅲ式期と報告された混土貝層下部から出土したものである。

図 2 - 2 材は鹿角右第二枝分岐点からの角幹部分

で、研磨により鹿角の凹凸をなくしてから加工している。欠損している部位Ⅰは横方向に膨らむようである。部位Ⅱでは盲孔部分の施されている面と斜方向の面取り部分の施されている面とは表裏の関係である。部位Ⅰと部位Ⅱとの間にはくびれがつけられると考えられ、その部分には削り痕が集中している。盲孔部分は、長さ 2.0cm・幅 1.5cm・深さ 0.4cm の長方形を呈する。盲孔中央には、鹿角の髓がわずかに露出している。部位Ⅲは、幅約 1 cm にわたって横方向の削りによって工字文がレリーフ状に施されている。部位Ⅳは非常に平滑であり、鹿角表面にみられる凹凸は磨かれている。鹿角の先端部がそのまま部位Ⅰの先端となっている。

図 2 - 3 材は鹿角右、角座から第二枝分岐点直下までの角幹である。部位Ⅰは左右それぞれに広がる突起状のものであり、装飾は工字文のレリーフである。部位Ⅱには長さ 2.6cm・幅 2.3cm・最深部 0.4cm の面取りのような部分がある。下部が挟られているのが観察でき、盲孔に該当するものと考えられる。また鹿角の第一枝除去の痕跡と思われる髓がみられる。部位Ⅲは幅約 1.5cm にわたって横方向の削りによって工字文がレリーフ状につくられている。盲孔部分周辺では自然面がわずかに残るものの、工字状文様帯より上では横方向の擦り痕が多くみられ、整形がなされたものと思われる。部位Ⅳは全体的に平滑に磨られているが、鹿角の自然面が残っており凹凸が多く見られる。

図 2 - 4 材は右側鹿角の角幹、第二枝分岐点よりである。部位Ⅰは欠損しているが、横に膨らむ形状になるようである。部位Ⅱでは斜方向の面取り部分と盲孔部分とは表裏の関係である。面取り部分には上から V 字状の切れ込みのようなものがみられ、これが穿孔部分にあたる可能性もある。盲孔部分より上部は先細りにするための幅 5 mm ほどの削り痕が、横方向に全面にみられる。部位Ⅰと部位Ⅱとを区別するためのえぐりと考えられる。盲孔部分の形態は、長さ 2 cm・幅 1.5cm・深さ 0.3cm の長方形である。部位Ⅲは、2 × 1 cm 程度の口唇状の模様が裏表の関係に 2 つ、横方向の削りによりレリーフ状につくられている。部位Ⅲ直下には鹿角の髓の部分が見られ、これも鹿角の枝を除去した跡とみられる。盲孔部分周辺および、棒状部分には鹿角の自然面をわずかながら残しているものの、全面研磨によって整形されている。髓の部分を中心に赤色顔料が残存していた。恐らく貼布されていたと考えられる。

第 3 図 5 材は鹿角であるものの部位は不明であ

藤沼邦彦氏のご教示による。

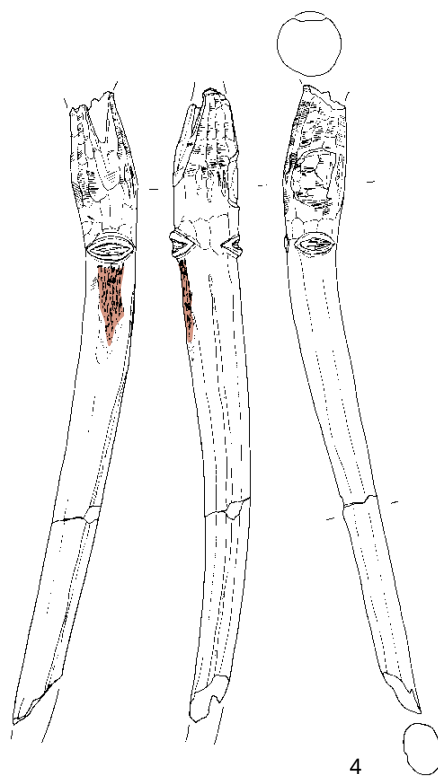
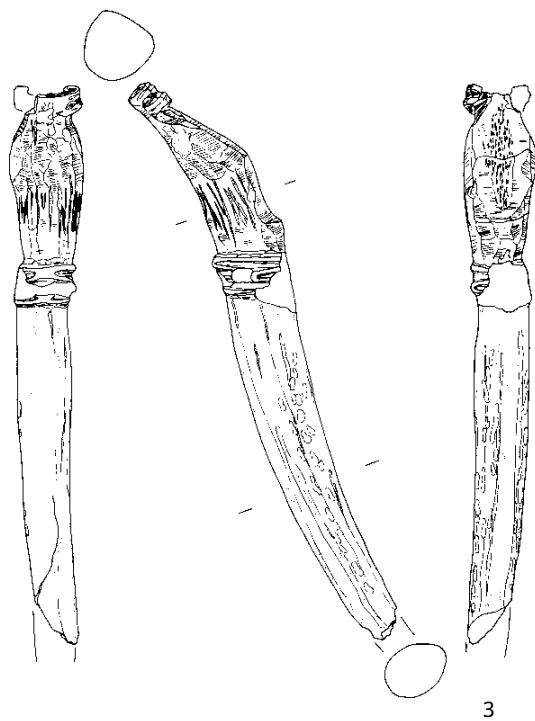
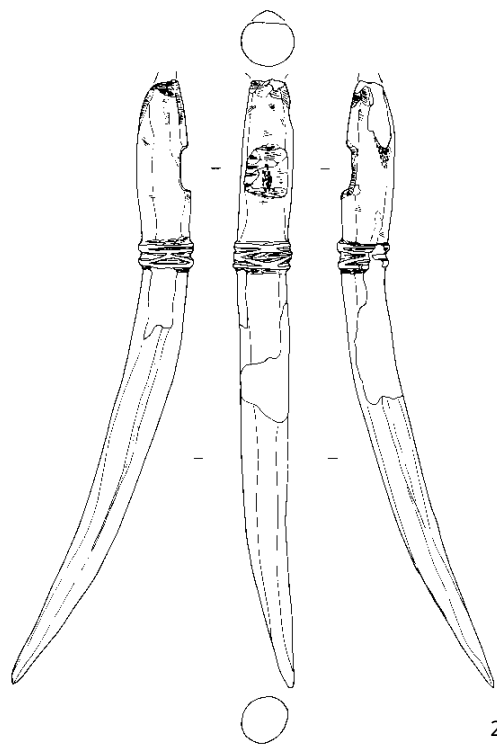
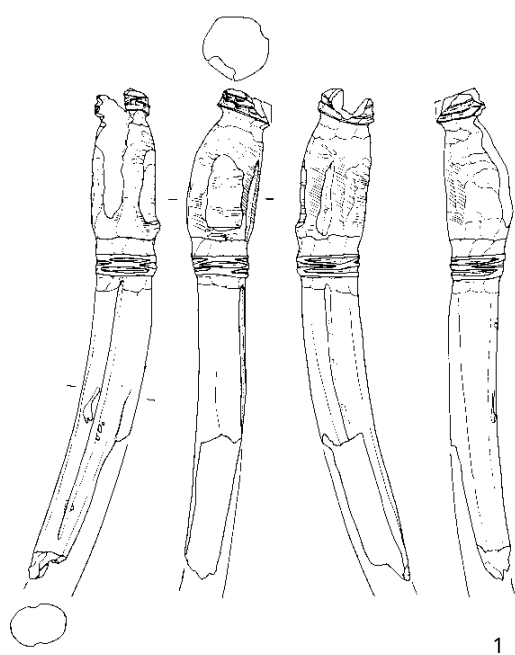


図2 各地出土の棒状鹿角製品 1 (1 : 3)
1 . 埴 2 ~ 4 . 荒海

る。部位Ⅰは欠損していると考えられる。上部をさらに先細りにするために横方向の擦り痕が集中している部分は、部位Ⅱと区別つけるためのえぐりと考えられる。部位Ⅲは幅約2cmにわたって横方向の削りによって工字文がレリーフ状に施されている。盲孔部分がないなど、省略された形態とみることができるのか。

図3-6 材は鹿角左、角座直上から第一枝分岐点までである。部位Ⅰ・Ⅳは欠損したものと考えられる。全面に研磨がなされており、自然面にみられる溝も痕跡程度を残すのみである。部位Ⅱには鹿角の第一枝を除去したときの痕跡と考えられる髄がみられる。部位Ⅲには幅1.8cmほどにわたって横方向の削りにより工字文がレリーフ状に施されている。

(3) 中手乱遺跡(図3-9)

静岡県清水市、御所川流域遺跡群のひとつである当遺跡は、御所川流域の後背湿地および微高地状に位置する。この資料は、自然流路内に倒れた形で出土した、弥生中期前葉に属する条痕文系の広口壺内から出土したと報告されている。

材は鹿角右第三枝を先端からの部分であり、角幹との分岐点の痕跡は資料には見られなかった。部位Ⅰは欠損しているものと思われる。現存している資料の上部は尖らすような削りが見られるが、部位Ⅰと部位Ⅱとを区別するくびれの部分であると考えられる。部位Ⅲは斜方向の面取り部分の周辺に細い凹みが列をなして見られる。部位Ⅲは横に一本線がレリーフされているのもであるが、ところどころ太いところ細いところが見られる。部位Ⅳは鹿角本来の凹凸を残しているところが見られる。中央部付近の一部であばた状の表面劣化部分が見られる。

上部から髄の部分が抜けている。水流による髄部分の劣化により、現状のように脱落したとも考えられる。一方で製品本来に穿孔などが加えられていた可能性も一概には否定できないであろう。

(4) 湯倉洞窟遺跡(図3-7)

長野県上高井郡高山村、湯沢の右岸に河床から約25mの差で南に向かって開口する、標高約1500mの地点に位置する。縄文晩期後半から弥生時代にかけてが洞窟利用の一つ最盛期であったとのことであるが、弥生中・後期あたりにも一つ最盛期があるようである。共伴した土器との関係は不明とのことである¹。

材は鹿角右の角座からの枝を落とした角幹を使用している。加工を施す前に全体をよく研磨して表面の凹凸を無くしている。部位Ⅰにも部位Ⅲ同様に幅約

1.5cmで工字文文様がレリーフされている。部位Ⅰには穿孔が上端部からなされており、部位Ⅱへと鉤の手になされている。穿孔部には糸擦れの痕跡は明確には認められなかった。部位Ⅲは幅1.3～1.6cmあり、工字文がレリーフされている。穿孔は上端部から現存部分は角座から第二枝分岐点付近までと考えられる。側面には一部表面が劣化した部分が見られる。

(5) 唐沢岩陰遺跡(図3-8)

長野県小県郡真田町、唐沢と呼ばれる菅平高原の渓谷内、標高1240mに位置する。縄文晩期の遺物も出土しているが、遺物の絶対量からして弥生中・後期が中心のようである。この資料の詳しい出土状況は不明である。

材は鹿角左を使用したと思われるが、部位は特定できなかった。部位Ⅰは幅約2cmほどで、全部位の中で最も太く、突起状になっている。ここにも文様がつけられており、一見陰刻による装飾に見えるが、これもレリーフによる装飾と考えられる。詳しくは後述する。部位Ⅰ上端部から穿孔が、部位Ⅱにかけて鉤の手状に施されている。その穿孔に続けて部位Ⅱから部位Ⅳの先端部にかけて溝状に抉りが入れている。部位Ⅲは縦0.8cm・横1cmの口唇状の文様がレリーフされている。

(6) 朝日遺跡(図4-11・12)

ここではかつての調査で出土した資料について、触れていく。ここで述べる2例は、61A区検出中に、谷Aと呼ばれる自然流路内に形成された貝層内から出土したものである。

図4-11 材の部位は特定できなかったが、鹿角の角幹部分を使用していると考えられる。部位Ⅰは欠損しており、現存の最上部は部位ⅠとⅡとを分けるくびれ部分と思われる。部位Ⅱは全面にわたり削り、表面を平滑にしている。上半分は反る形で細くなっている。鹿角表面の溝の痕跡が残っており、材の形自体がそうであったことを示している。部位Ⅱの中心には縦1.5cm・横1.2cm・深さ0.2cmを測る盲孔が施されている。最大1.5cmほどの幅で鹿角表面がそのまま残存している、帯状の突起部分があり、部位Ⅲに相当するものと考えられる。部位Ⅳは凹凸のない、鹿角の自然面をそのまま使用しているのか。途中欠損している。

図4-12 11同様、材の部位は特定できなかったが、鹿角の角幹部分であろう。部位Ⅰは突起状を呈し、部位ⅠとⅡの境には抉りが入っている。その抉りに沿う形で斜方向に穿孔がなされている。部位Ⅱは全体を縦方向に削っている。鹿角表面の凹みや髄の痕跡が見

¹ 湯倉洞窟の正式な報告書が近日刊行とのことであり、詳しくはそちらを参考されたい。

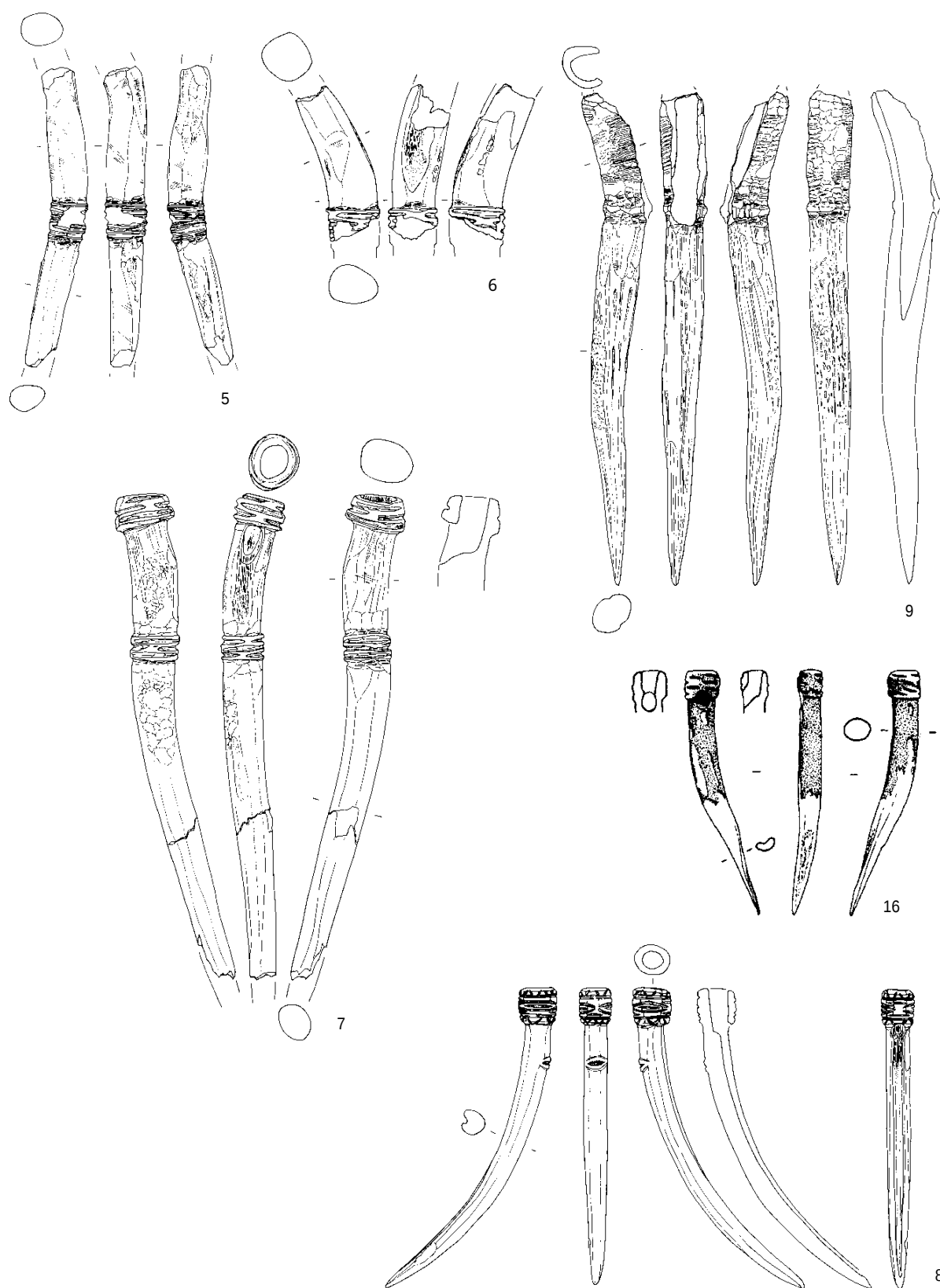


図3 各地出土の棒状鹿角製品 2 (1 : 3)

5・6. 荒海 7. 湯倉 8. 唐沢 9. 中手乱 16. 水走・鬼虎川(16のみ原田・若松・曾我 1998 より引用)

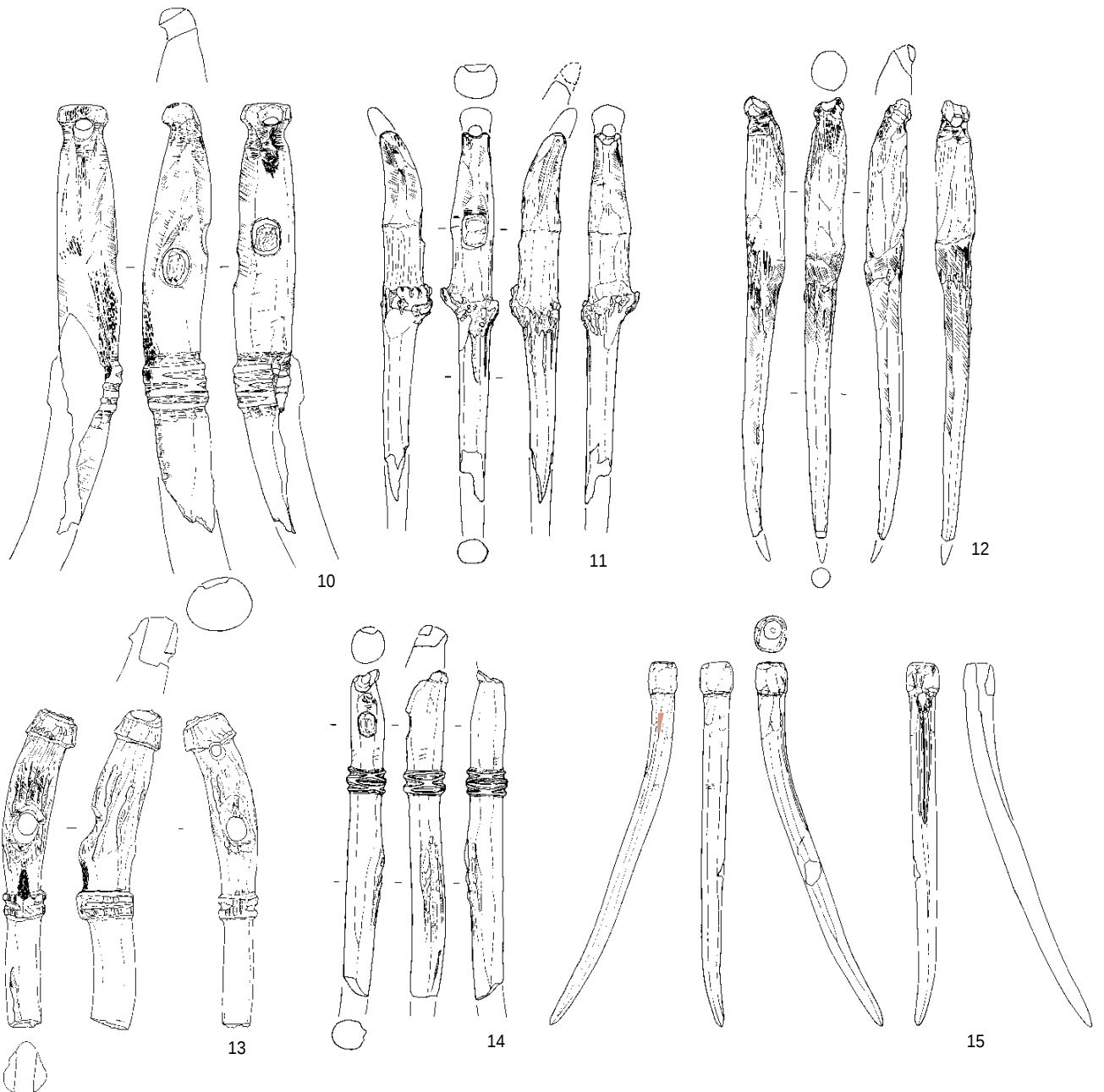
られる。部位Ⅲと見られる部分は、幅1cmから1.5cmほどで鹿角表面が残存している所である。この部分も表面が研磨されており、鹿角表面の凸部分のみ平滑にされているようだ。部位Ⅳはよく研磨されており、鹿角表面の凹凸はほとんど残っていない。先端のごく一部のみが欠損している。

(7) 西志賀遺跡(図4 - 13・14)

名古屋市北区、庄内川右岸沖積地上に形成された微高地上に位置している。弥生前期から後期までの各時期の貝層を持つ、環濠集落である。この遺跡からは該

当資料が2点知られている。

図4 - 13 材は鹿角の角幹部分から先端部にかけての部分である。部位Ⅰは突起状になっている。陰刻・レリーフのいずれかによる文様は見られない。部位Ⅰ上端から部位Ⅰ・Ⅱの境にかけて鉤の手状の穿孔が施されている。部位Ⅱにはさらにもう一つ平面形態が長さ1.8cm・幅1.1cmの楕円形状穿孔が施されており、これが他の資料での盲孔に相当するものと考えられる。部位Ⅲは幅1.5cmほどで工字文がレリーフされている。部位Ⅳは部位Ⅲに接する部分はかなりの削りを



第4図 各地出土の棒状鹿角製品3(1:3)

10 ~ 12. 朝日 13・14. 西志賀 15. 保美

加え、部位Ⅲを浮き上がらせている。それより下部は鹿角自然面の凹みもわずかに残存している。先端は人為的に切断されているようにも見えるが確かではない。この出土状態に関しては不明である。

図4-14 材は鹿角左の第三枝先端から第四枝発生部分までである。部位Ⅰはくびれ部分で欠損が見られる。部位ⅠとⅡの境には穿孔がなされている。部位Ⅱには盲孔が見られる。長さ1.1cm・幅0.8cm・最深部3mmの楕円形を呈し、正面から向かって右側が深くなっている。部位Ⅱ上方には鹿角の髓の部分が見られ、ここで鹿角の枝を除去したと考えられる。部位Ⅲは幅1.5cmわたって、工字文がレリーフ状につけられている。部位Ⅳは上部3cmほどまでに部位Ⅲとの区別をつけるための横方向の擦り跡がみられる一方、それより下部は鹿角の自然面が残されている。杉原荘介氏らの発掘時に出土したもので、報告には朝日式から貝田町式土器を出したⅡ層下部から出土したということ以外は記述が見られないことから、特筆すべき出土状態ではなかったようである。

(8) 保美貝塚(図4-15)

愛知県渥美郡渥美町、沖積地に望む段丘上に位置する。渥美半島の貝塚群の一つであり、東海地方の縄文晩期を代表する遺跡である。この資料は中山英一氏の発掘資料である。この地点では、貝層下の黒色土層からは晩期前葉から中葉の土器が出土し、貝層の主体は晩期後葉の突帯文期であったようである。資料の出土層位などは明らかではない。

図4-15 材は鹿角の先端部を使用していると考えられる。部位Ⅰは約1.5cmにて作り出しを形成し、上端部よりの穿孔が鉤の手状に開けられており、それが部位ⅠとⅡの境に達している。それがさらに下方に向かって溝状に延びている。遺物自体は全体的によく研磨されており、削り痕などが痕跡を残すのみとなっている。一部に赤色顔料の痕跡が残存していた。部位Ⅲは見られず、部位ⅡとⅣとの区別も明瞭ではない。

(9) 水走・鬼虎川遺跡(図3-16)

大阪府東大阪市、鬼虎川による後背湿地から自然堤防上に立地する。資料は、縄文晩期末から弥生前期にかけて、凹地内に形成された貝層内から出土した。

図3-16 鹿角の使用部位は不明である。部位Ⅰが最大幅1.8cmほどで、すべての部位の中で幅が太く突起状になっている。横方向に短い線状の陰刻が施されている。陰刻により工字文風の文様をレリーフ状にする意図があったかもしれない。部位Ⅰの上部から穿孔がなされており、部位Ⅰ・Ⅱの境に向かって鉤の手状に開けられている。部位Ⅲは見られず、部位Ⅱと部位Ⅳとの境も明瞭ではない。下半を切断により尖らせてあり、その部分が部位Ⅳにあたるかもしれない。全体に黒漆が塗られているのは特筆できる。

3 棒状鹿角製品の詳細検討

(1) 形態分類

次の3形態に分類できる。

A類 レリーフ状に立体的に浮き上がらせた文様帯を持つことを大きな特徴とするもの。文様帯は極めて装飾に富んだものもあれば、省略的な様相を呈するものもある。荒海貝塚の一例(3)を除けば、部位Ⅰ・Ⅱの境に垂飾のための穿孔が施されているもの、およびその可能性のあるものがほとんどである。

B類 部位Ⅰから鉤の手状に穿孔が施されており、かつレリーフ状に立体的に浮き上がらせた文様帯を持つもの。湯倉洞窟(8)や西志賀貝塚(13)が該当する。

C類 部位Ⅰから鉤の手状に穿孔が施されているもの。部位Ⅰは作り出されることより突起状を呈し、下部との区別は明瞭である。唐沢岩陰遺跡(9)、保美貝塚(15)、水走・鬼虎川遺跡(16)が該当する。

(2) 各形態ごとの部位の構成

前述したように、この類例は部位の構成にある画一性が見られ、上から「部位Ⅰ」・「部位Ⅱ」・「部位Ⅲ」・「部位Ⅳ」の順で構成されている。この構成部位を比較し並べたものが、第5図である。A類では部位Ⅰが破損しているものが多いものも、現存しているものに関してみれば(1・3・10・12)1cm前後となっている。工字文風のレリーフの見られる例(1・3)もある。部位Ⅱは椿・荒海貝塚例でほぼ5cm前後である一方、朝日遺跡の例では、7~12cmと長くなる傾向にある。また、部位Ⅱに施されている盲孔に関しては、椿・荒海貝塚例では方形の段状に施されている一方、朝日・西志賀遺跡例では長楕円形状に決るように施されている。いずれの盲孔も深さ2~3mm程度を測ることは共通している。盲孔の存在が推定されるもの(9)や、もとも見られないもの(12)もある。部位Ⅲは文様帯部分である。工字文状のもの(1・2・3・5・6・10・14)、口唇状のもの(4)、隆帯状のもの(9・11・12)が見られ、幅1.5cm未満がほとんどである一方、朝日遺跡例(10)は幅2cm以上あり特異である。部位Ⅳは鹿角自然面に見られる凹凸を研磨により平滑にしているものが目に付くなかで、自然面を残している例も見られる(3・5・9)。欠損しているものが多いことが特に注目される。

B類は部位Ⅰの突起状のあり方に大きな特徴があり、最大幅が部位Ⅰにある。工字文風のレリーフが見られるもの(16)、陰刻による装飾が施されているもの(8)、装飾が見られないもの(15)がある。鉤の手状の穿孔に続いて溝が下りているものがあるのも特徴的である(8・15)。8には口唇状のレリーフが見られこれが部位Ⅲに相当する。それ以外は部位Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの区分が不明瞭である。黒漆による装飾が施されているものが

あるのは、注目される(16)。この形態のものはすべて完形品で出土している。

C類は部位Ⅰ上端部から部位Ⅰ・Ⅱ境に見られる鉤の手状の穿孔と、部位Ⅲに特徴がある。A類と共通しているところが多いものの、部位Ⅱには盲孔が見られない。7では直通する穿孔があり、13では鉤の手状の穿孔自体が、部位Ⅱに達する時にもかなり大きな穿孔となっている。両者とも平面的な大きさで盲孔と同格になっていることから、盲孔に相当するものであろうと考えられる。部位Ⅳは欠損が見られる。

(3) 部位Ⅰ・Ⅲの文様分類(図6)

部位Ⅰ・Ⅲにつけられている文様には工字文状、口唇状、隆帯状の三種類が見られる。

(a) 工字文状のもの(1・2・3・5・6・7・10・13・14・16) 棒状鹿角製品の中ではもっとも一般的なものである。文様の施し方はすべてレリーフであり、文様自体浮き上がって見えている。工字文の一単位が短くて密なもの(2・6・14)と一単位が長くなるもの(7・10・13)とがある。一単位が長くなるもののうち、7・10は単位のピッチに不安定さが見られる。

(b) 口唇状のもの(4・8) 工字文の変形したものと考えられる。文様は(a)同様、レリーフが主体となると考えられる。唐沢岩陰資料の部位Ⅰは一見陰刻による装飾に見えるが、部位Ⅰ全体が突起状になっており、そのなかでさらに文様のみを浮き上がらせること

はされなかったようである。ピッチに不安定さがあるものの、工字文状および口唇状の文様を連続してレリーフしているのとらえることができる。

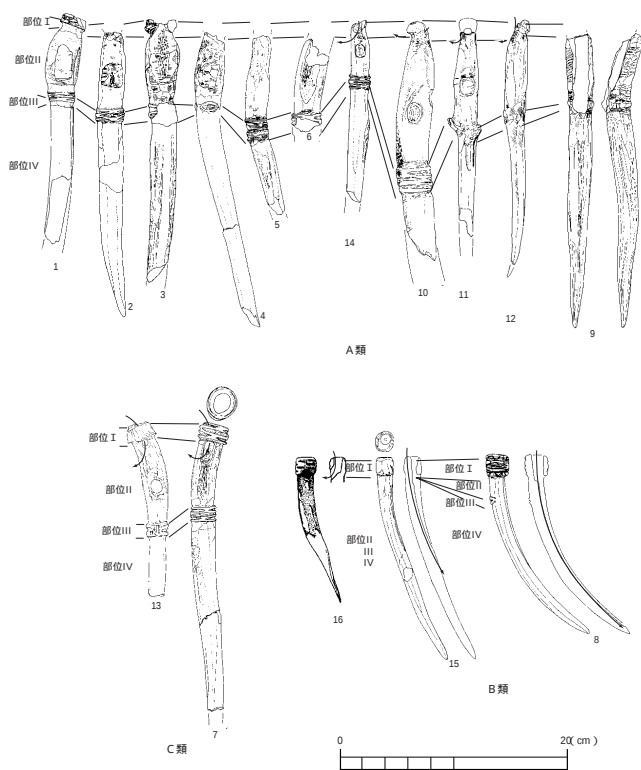
(c) 隆帯状のもの(7・11・12) (a)(b)がさらに単純化した結果、生じたものと考えられる。7は5mm程度の細い隆帯状になっている。一部、さらに細くなっている部分があり、工字文状の意匠がわずかながら見られるものとも考えられる。11は上下から削ることによって部位Ⅲを浮き上がらせているもので、鹿角の自然面をそのまま残しているものである。12は、同様ではあるが、隆帯上を研磨して、表面の凹凸を平滑にしている。

(4) 部位Ⅰの欠損について

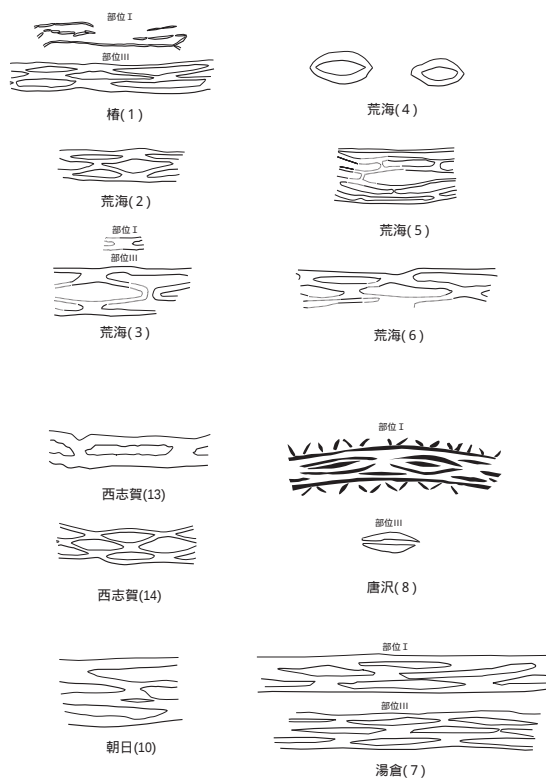
特にA類には部位Ⅰが欠損しているものが多く見られる。破損は部位Ⅰ・Ⅱ境のくびれ部で起こっている。朝日・西志賀の例では、そこに穿孔が施され、紐を通し垂飾したものと思われる。荒海・中手乱例では部位Ⅰ・Ⅱ境の穿孔の有無は不明である。

(5) 出土状況

出土状況に関して、特筆されている報告例はほとんど見られない。貝塚・貝層内から出土しているものは他の遺物と同様の包含状態であったようである。唯一、中手乱遺跡の例は出土状態に有意性が認められおり、「広口壺の中に収められた状態で、流路内において埋没したものと推測される」と、報告されている。



第5図 形態別部位構成説明図



第6図 部位Ⅰ・Ⅲ文様集成図

4 考察

(1) 時期的変遷 (図7)

発掘時の状況および部位Ⅰ・Ⅲの文様の様相から棒状鹿角製品の時期的配列を試みたのが図7である。この時期的配列は、遺物の廃棄時期であることを明言しておく。A類の発生に位置付けられる椿貝塚・荒海貝塚例は、部位Ⅲの変形工字文風のレリーフが見られること、出土層位などからも大洞A'かそれに併行する時期で考えられる。それら後続するのは、弥生中期以降である。弥生中期とされる西志賀貝塚例(14)の部位Ⅲは変形工字文のピッチが短く、精巧であるのは注目される。その一方で弥生中期になり部位Ⅲの隆帯化が見られる一方、変形工字文の崩れが少し見られるものの棒状鹿角製品の中で最大かつ精巧なものも出現する(10)。

B類は保美貝塚例(15)を初源とした。この遺物の所属時期は断定は難しいものの、発掘時の状況からして晩期後葉の突帯文期に属する可能性が高く、それ以前にはさかのぼりうるものの下る可能性は低い。晩期末から弥生前期に属するとされる水走・鬼虎川遺跡では崩れた工字文風のレリーフが見られる。唐沢岩陰例(8)を最も後出するものにしたもの、時期的な決定は難しい。部位Ⅰ・Ⅲの文様から晩期末以降であると思われる、他の遺物の所属時期のあり方から弥生時代のある段階まで下がる可能性がある。

C類は形態的にA類とB類とが複合した形態であると考えられる。弥生前期に属する西志賀遺跡例(13)を初源とする。湯倉洞窟例をそれに後続する位置に置いているが、根拠は朝日遺跡例(10)と工字文のあり方が類似していることである。湯倉洞窟では縄文晩期後半から弥生時代にかけてが中心時期の一つであると報告されていることから、西志賀(13)以降、朝日(10)までの間の所産かと考えられる。

(2) 分布 (図8)

分布は宮城県・千葉県・静岡県・長野県・愛知県・大阪府に見られるものの、管見の限りの資料数では、関東地方から東海地方に分布の中心が見られる。最も点数の多いA類が広汎な範囲を示し、太平洋岸側の遺跡からの出土である。B類は長野・愛知・大阪と範囲が狭まり、C類では長野・愛知のみとなる。それぞれの資料の時期を考慮すれば、発生時期の大洞A'には分布の東側(関東・東北)が中心であったものが、時期が下るにしたがって東海・中部地方に中心が移ってく

るとも考えることができる。

(3) 棒状鹿角製品自体に関して

今回の調査でもこの製品の部位Ⅱに付けられている盲孔の性格を推定することができなかった。西志賀・朝日例では楕円形を呈している一方、先行する椿・荒海例では方形の段のような挟りもしくは面取状になっている。恐らく、今後この遺物を系統的に追及するには、この方形挟りの追及が重要となるであろう。同様な対比として、西志賀・朝日例では部位Ⅰ・Ⅱとの境に垂飾のための穿孔が見られる一方で、椿・荒海例では無いもしくは不明である、ことを指摘できる。

(4) 朝日跡出土資料の周辺

東海地方で、弥生時代中期中葉にまでこの遺物が見られることについて考えていきたい。初源としている荒海・椿貝塚例は大洞A'式期であるため、「縄文」「弥生」と二項対立的に用いるならば、「縄文最終末もしくは弥生初頭に出現したものが弥生中期中葉にまで残存した」という説明になるのであろうか¹⁾。「縄文」から「弥生」へ継続してみられる精神文化を示す遺物として、石棒・独鈷状石製品・環状石斧・多頭石斧などがあり、朝日遺跡では石棒状木製品も出土している。これらの遺物は発生時期・相互の関連性において不明な点が多いが、東海の縄文晩期後葉から弥生中期中葉まではこれらの遺物を複合体とした精神文化を形成したのであり、それは「縄文時代」以来の在来のものと、「弥生時代」以降の外来の影響により、独自発生したものとの複合して、形成されているようである。これらの遺物も棒状鹿角製品同様に製品として画一化されていることから、伺えられる。

また、棒状鹿角製品に類似したものに「有鉤鹿角製品」と呼ばれているものがある。鹿角の角座・第一枝を残す一方、第二・三枝を除去し、角座部分には垂飾のための穿孔がなされている。春成氏によって集成がなされているが(春成前掲)、それ以降に出土した愛知県法海寺遺跡資料を含めても分布は東海から中国地方、特に中心は東海地方から関西地方になりそうである。この資料は東海地方において精神文化の一端を担うものとして共存していたようだ。しかし、有鉤鹿角製品は「弥生時代」以降の外来の影響により、独自発生したものと考えられ、棒状鹿角製品と分布域のずれがあり、さらに有鉤鹿角製品と棒状鹿角製品との中間形態的なものの存在が見られないことから、両者は使い分けが行われていたものと推測される。

¹⁾ ここでのこの表現が、最適であるとは思われない。縄文時代が長い期間のさまざまな文化内容を包括した名称であると同様に、弥生時代も同様と考えられるからである。この場合のみ単に時間的な時代区分の単位として「縄文時代」「弥生時代」という名称を使用している。

縄文晩期

弥生前期

弥生中期

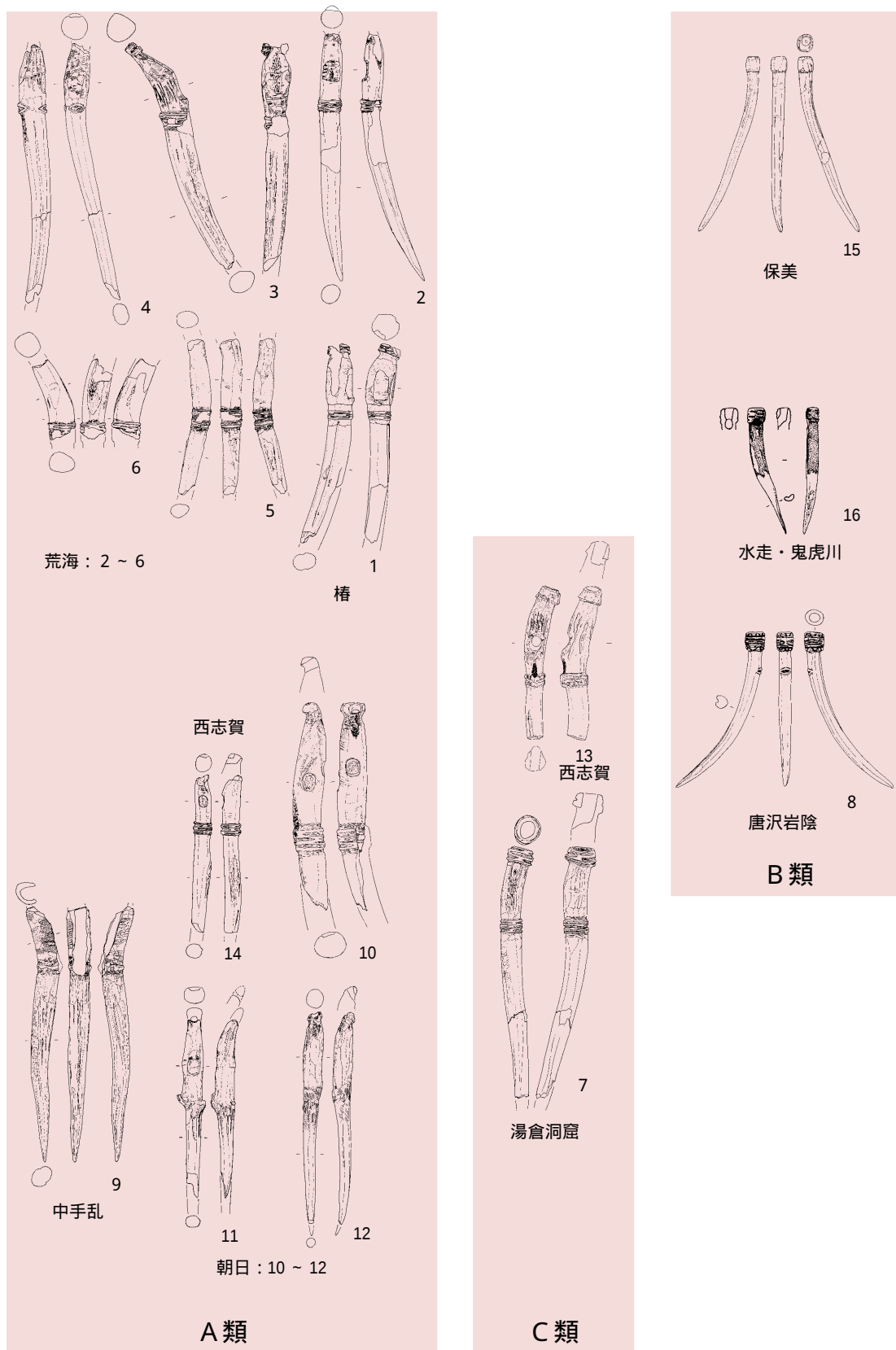


図7 棒状鹿角製品変遷図



1 椿貝塚 2 荒海貝塚 3 湯倉洞窟遺跡 4 唐沢岩陰遺跡 5 中手乱遺跡
6 朝日遺跡 7 西志賀遺跡 8 保美貝塚 9 水走・鬼虎川遺跡

図8 棒状鹿角製品分布図

表1 棒状鹿角製品一覧表

遺物 番号	遺跡名	所在地	時期	形態 分類	出土状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	l・r	残存部位	所蔵・保管機関	文献
1	椿貝塚	宮城県亘理郡亘理町	大洞A	A	貝層内出土	(20.0)	(5.2)	(2.6)	(76.0)	l	角幹、第二枝より先端にかけて	亘理町教育委員会	志間1975
2	荒海貝塚	千葉県成田市	千綱・杉田III式	A	混土貝層下部から出土	(24.0)	2.1	2.1	(44.4)	r	第二枝分岐点から角幹および第三枝	早稲田大学會津八一記念博物館	西村1984
3	荒海貝塚	千葉県成田市	千綱・杉田III式	A	混土貝層下部から出土	(22.0)	3.2	3.1	(90.5)	r	第二枝分岐点より先端にかけての角幹	早稲田大学會津八一記念博物館	西村1984
4	荒海貝塚	千葉県成田市	千綱・杉田III式	A	混土貝層下部から出土	(25.0)	2.6	2.7	(67.0)	r	第二枝分岐点より先端にかけての角幹	早稲田大学會津八一記念博物館	西村1984
5	荒海貝塚	千葉県成田市	千綱・杉田III式	A		(15.2)	1.9	1.9	(28.8)	-	部位不明	早稲田大学會津八一記念博物館	西村1984
6	荒海貝塚	千葉県成田市	千綱・杉田III式	A		(7.8)	(2.7)	(2.3)	(30.2)	l	第二枝分岐点より先端にかけての角幹	早稲田大学會津八一記念博物館	西村1984
7	湯倉洞窟遺跡	長野県上高井郡高山村	縄文晩期末～弥生	B		(24.4)	3.4	2.9	(68.0)	r	第二枝分岐点より先端にかけての角幹	高山村教育委員会	関 1982
8	唐沢岩陰遺跡	長野県小県郡真田町	縄文晩期末～弥生	C		15.1	1.9	1.6	20	l	第一枝分岐点からの角幹全体(第二枝)	長野県立歴史館	樋口1982
9	中手乱遺跡	静岡県三島市	弥生中期前葉	A	自然流路内、口を東北方向に向けて倒れていた広口壺内より出土	(25.0)	(2.1)	(2.1)	(50.5)	r	第三枝より先端部	静岡県教育委員会	佐藤・岩本1998
10	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	貝田町古段階以降	A	自然流路内に形成された貝層内より出土	(20.2)	3.0	2.6		l	第二枝分岐点より先端にかけての角幹	愛知県教育委員会	蔭山2000
11	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	弥生中期前葉～中葉	A	自然流路内に形成された貝層内より出土	(17.4)	2.7	2.4	(49.8)	-	部位不明	愛知県教育委員会	宮腰編1992
12	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	弥生中期前葉～中葉	A	自然流路内に形成された貝層内より出土	(20.6)	2.0	1.9	(46.8)	-	部位不明	愛知県教育委員会	宮腰編1992
13	西志賀貝塚	名古屋市北区	弥生前期以降	B		15	2.1	2.4		r	第三枝より先端部	名古屋市博物館	吉田・紅村1958
14	西志賀貝塚	名古屋市北区	朝日～貝田町式	A	川層混土貝層下部より出土	(15.4)	(1.8)	1.8	(41.2)	l	第三枝先端から第四枝先端	明治大学考古博物館	杉原1961
15	保美貝塚	愛知県渥美郡渥美町	縄文晩期	C		16.9	6.0	1.5	20.4	-		南山大学人類学博物館	紅村1963
16	水走・鬼虎川遺跡	大阪府東大阪市	縄文晩期末～弥生前期初頭	C	凹地内に短期間に形成された貝層内より出土	12.4	3.6	1.4				東大阪市教育委員会	原田・若松・曾根1998

残存部位に関して川添が現生標本との比較で行った。

(5) 今後の課題

今回は、朝日遺跡98年度出土資料を中心にその存在の背景を中心に考察してきた。したがって、縄文後期以降の部位の無い同製品に関する考察、およびその関連性に関してはほとんど言及できなかった。そのことに関して注目されるものは、人骨に副葬された状態で出土した福岡県飯塚市山鹿貝塚例である。その一方で、荒海貝塚では棒状鹿角製品を出した場所とは別地点で、前浦式に属するとされる、棒状鹿角製品ではない、類似の製品(春成の言う「鳥形短剣」)が出土している。この製品は、愛知県吉胡貝塚・奈良県橿原遺跡・岡山県百間川沢田遺跡などでも出土しており、時期的にも棒状鹿角製品の多く見られる時期に先行している。時期・分布としては棒状鹿角製品より限定されてくるようである。出土のあり方にも多少相違がみら

れ、両者の関連性のあり方はこれからの課題である。

また、上述したことではあるが、棒状鹿角製品との関連が考えられる遺物として石棒・独鈷状石製品・環状石斧・多頭石斧をあげたが、その中で特に独鈷状石製品との関連性を一考する必要があると考えられる。さらに時期的に共存はしないが、御物石器との文様での系譜関係があるとも指摘されている。これらの検討も今後の課題である。

本稿をまとめるにあたり、資料調査などに際し次の各機関・方々に御教示をいただきお世話になった。記して感謝の気持ちに代えることとしたい(敬称略)。

江崎 武、大塚達朗、藤沼邦彦、綿田弘実、渡辺 誠、静岡県教育委員会、高山村教育委員会、長野県立歴史館、名古屋市博物館、明治大学考古博物館、早稲田大学會沢八一記念博物館

資料引用文献

- 薩山誠一 2000『朝日遺跡』『平成11年度 愛知県埋蔵文化財センター年報』28 - 29頁 愛知県埋蔵文化財センター
佐藤五十三・岩本 費 1998『御殿川流域遺跡群 IVa(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
志間泰治 1975『原始・古代の豆理』『豆理町史』上巻31 - 71頁 豆理町
関 孝一 1982『湯倉洞窟遺跡』『長野県史 考古資料編』全一巻(二)主要遺跡(北・東信) 191 - 195頁 長野県
西村正衛 1984『千葉県成田市荒海貝塚(第1・2次調査)』『石器時代における利根川下流域の研究・貝塚を中心として』573 - 634頁 早稲田大学。(再録)
原田 修・若松博恵・曾我恭子 1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』東大阪市教育委員会
樋口昇一 1982『唐沢岩陰遺跡』『長野県史 考古資料編』全一巻(二)主要遺跡(北・東信) 613 - 623頁 長野県
宮腰健司編 1992『朝日遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
吉田富夫・紅村 弘 1958『名古屋市西志賀貝塚』文化財叢書19 名古屋市
杉原莊介・岡本 勇 1961『愛知県西志賀貝塚』『日本農耕文化の生成』355 - 376頁 日本考古学協会
宮腰健司編 2001『朝日遺跡』(財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

参考文献

- 金子浩昌・西澤成視 1985『骨角器の研究 縄文篇』慶友社
金子浩昌・西澤成視 1986『骨角器の研究 縄文篇II』慶友社
後藤信祐 1985『独鈷状石器小考』『唐澤考古』5 1 - 5頁 唐澤考古学会
後藤信祐 1986『縄文時代後晩期の刀剣形石製品の研究(上)』『考古学研究』第33巻3号31 - 60頁 考古学研究会
後藤信祐 1987『縄文時代後晩期の刀剣形石製品の研究(下)』『考古学研究』第33巻4号28 - 48頁 考古学研究会
橋本 正 1976『御物石器論』『大境』第6号1 - 44頁 富山考古学会
春成秀爾 1985『鉤と壺・有鉤短剣の研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集1 - 62頁 国立歴史民俗博物館
渡辺 誠 1978『近畿地方の遺跡と遺物(5) 低地の縄文遺跡』『古代文化』第30巻2号37 - 43頁 財団法人 古代学協会

補記

朝日遺跡には、以上の資料以外にも棒状鹿角製品の可能性が高いものが一点報告されている(第9図)。環濠と考えられる溝SD101内に形成された貝層から出土したもので、西志賀期~朝日式期に属する。鹿角の角座骨を使用し、頭蓋骨と接する面は自然面のままで、文様体の上下に挟りを入れ文様体を浮き上がらせている。レリーフされた工字文風の装飾は三単位で一周する。現存部分を部位・と見るならば、頭蓋骨と接する自然面を部位に見られる斜方向の面取りと同一効果を表しているといえることができ、A類とされよう。この面には幅0.5~0.7cm、長さ1cm未満の凹凸が数個見られ、これが弥生中期の資料に多く見られる盲孔の祖形になった可能性がある。この場合上端部の欠損状況から、断言はできないが部位・境界の穿孔部分で欠落しているとも考えられる。

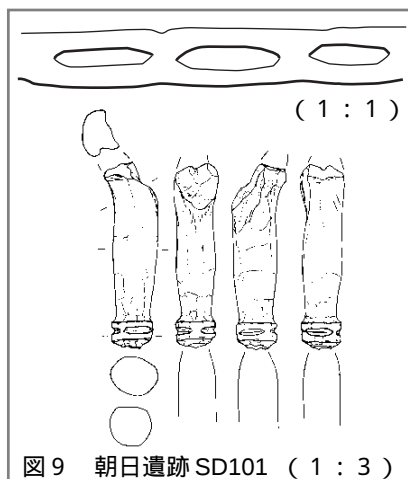


図9 朝日遺跡 SD101 (1:3)



写真1 朝日遺跡 98 B区出土資料